青山教会会報

「目標を目指して走る」

詩編三七編一～九節
フィリピの信徒への手紙三章一二～一四節

牧師　増田将平

神を信じる生き方は、さながら目標を目指して走るランナーのようです。走者パウロは自分の原動力をこのように言い表します。「自分がキリストに捕らえられているから」です。すべてはパウロがキリストと出会い、洗礼を受けた時から始まりました。私どもにとってのスタート地点も洗礼です。

パウロはこのレースを走る前の自分の過去を語ります。五節以下で自分が教会の人々を迫害していた過去を振り返っています。その時は「これは神のため、自分は神に向かって走っている」と思っていたのです。そのパウロがある時キリストと出会い、自分が走っていた方向が反対だったことに気づきました。パウロは、キリストと出会った時のことをこのように語ります。「私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさ」「わたしにとって、有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失とみなすことになった」「キリストのゆえに、わたしは全てを失いましたが、それら(自分の家柄、学歴、地位)を今は屑と思っています」彼はキリストと出会って価値観が変わりました。何が利益で何が損失かについての見方が変わり、人生の方向が変わりました。ペトロもそうでした。ある時、主イエスはご自分が十字架につけられることを弟子たちに打ち明けます。するとペトロは主イエスに言いました。「先生、あなたには絶対にそんなことが起きてはいけません。道を間違えていますよ。私どもはそんなつもりで漁師の仕事を捨てて来たのではないのです」十字架の死は、ペテロたちの損得勘定とあまりに違いました。これまで自分が捨てて来たこととの採算が合わなくなると思ったのです。すると主イエスは言われます。「サタンよ、退け。あなたは神のことを思っているようで、自分のことしか思っていない」さらに主は、この時のペトロたちには理解し難い事を言われます。

「自分の命を救いたいと思う者はそれを失うが、私のために命を失う者はそれを得る。人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、なんの得があろうか」(マタイ一六章)

ペトロは復活した主イエスと出会い、あの時の自分が目標を見誤っていたことを知ります。ペトロも新たな目標を目指して走り出しました。

しかし、このレースにはいろんな障害物があります。パウロは「後ろのものを忘れ」と言っています。つまり、私どもの過去のことでしょう。思い起こすと、自分の背中を押し出してくれる過去ばかりではないかもしれない。走っていることが全て無駄に思えてくるような過去があります。後悔の数々が、後ろから追いかけ来て、私を捕まえようとすることもあるでしょう。

ある説教者は八三歳の時に説教で「後ろのもの」についてこう述べています。「人間には得意になれるような成功があれば、失意に陥れられるような失敗や恥もあるでしょう。それが人間を活かしたり、殺したりするのであります。年寄り

は自分がしてきた自慢話をして、今は何もできないことの言い訳をしようとするかもしれません。そして、それによって働きのない自分の生きがいを確かめようとしているのであるかもしれません」「若い人でも、過去の失敗を忘れるのは易しいことではない」すでに「年寄」であったこの牧師は、たとえ自分が年寄りになっても、目標をめざして、前向きに生きることができることを知っているのです。それがこの箇所が告げていることです。私どもは、何歳になっても、神様からなすべき務めが与えられているのです。その中で最も大きなことは、教会のために、教会の兄弟姉妹のために、主の栄光のために祈ることです。

「後ろのもの」、過去の罪を「忘れなさい」と言われても、難しい気がします。パウロは言います。「自分がキリスト・イエスに捕らえられているから」パウロは、キリストに罪を赦されて、自分の過去、後ろのものである罪に背を向けることができるようになりました。後ろを振り向くとそこにキリストが立っておられるのです。キリストが私どもの諸々の罪のために死んでくださった。私が過去の罪の数々に目を向けると、それらすべての罪の上に十字架が立っているのを見るのです。

パウロは古代ギリシアのオリンピアの競技会（オリンピック）を念頭に置いていたのでしょう。ただ、私どものレースは人と比べるものではなく、勝ち負けもありません。自分に与えられたレースを走り続けるだけです。自分との、自分の罪との競争です。

「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」とあります。「前」とは「神がキリスト・イエスによって上へ召して」とありますから、「上」とは「天」のことです。この後で「私たちの本国は天にあります」と書かれているとおりです。それなら、天に向かう道はどこにあるのでしょうか。地上を必死に進む私どもには、先が見えず、前、天がどこにあるのかわからない時があるかもしれない。そんな時、ゴールから声が聞こえてきます。キリストの声です。このお方はゴールから、私どもの名前を呼んでくださっているのです。

パウロは、神が私どもに「賞を与えてくださる」と言っています。この賞、神様からのご褒美とはつまり「なんとかして、死者の中からの復活に達したい」と書いてあるように「死者の中から体の復活という」とてつもない賞です。死を迎えたこの私は、やがて復活し、キリストと、顔と顔を合わせて、お会いするのです。先日、上へ召された私どもの姉妹である由記子さんは、召される数日前にこう言われたそうです。「イエス様が呼んでいる」主イエスの呼び声を聞いたのです。この姉妹が聖書に線を引いた箇所はこうです。「私にとって生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」

私どもは主イエスが自分を捕らえておられるので安心して走り続けることができます。一緒に走る仲間たちもいます。教会です。パウロは何度も「兄弟たちよ」と呼びかけます。互いに励まし合い、声を掛け合って走り続ける。礼拝からまた走り出します。私たちの道は天に向かう道です。キリストの福音にふさわしく走り続けることができますように。

（一一月一四日主日礼拝説教要旨）